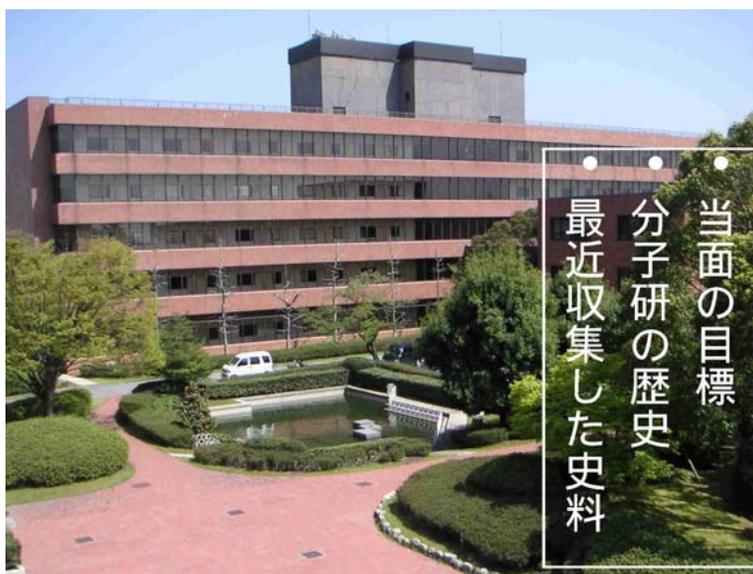


分子研アーカイブズの現状

木村 克美（分子科学研究所）



今日は、分子研アーカイブズの現状ということで、この一年間に収集した史料について、またそれに関連した分子研の歴史について、最後に当面の目標についてお話しさせていただきます。分子研設立についての具体的な動きが出始まりましたのは昭和 36 年頃でした。実際に設立されたのは昭和 50 年でしたので、創設に至る 14 年間の長い経緯があります。

第 I 部 本研究課題の成果報告

分子研史料室は（正式には史料編纂室と言いますが）、今年 4 年目に入りました。昨年の春から鈴木さとみさんに加わっていただき、アーカイブズの史料の整理や目録作りなどを一緒に進めてきております。



史料室

分子研史料室の場所は南実験棟にあります。昨年 2 番目の史料室が設けられ、この写真のように新しい書棚が取り付けられ、今年になって中性紙文書保管箱 60 個を並べました。これらの箱は、核融合研の松岡先生のご配慮で、総研大プロジェクトから支給して頂きました。

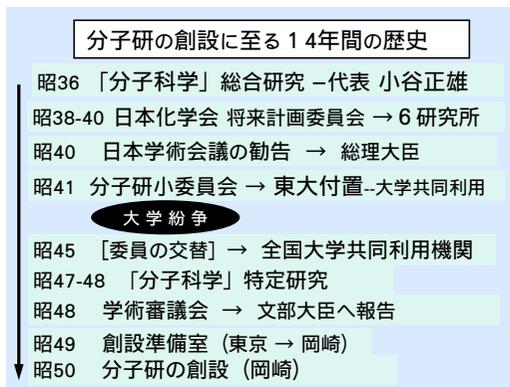
最近収集した史料

長倉三郎「分子研前史」
分子研レターズ 57
(平成20年5月)

さて、最近収集した史料の中で特に重要なものの一つは、分子研レターズに掲載された長倉三郎先生の『分子研前史』です（平成 20 年 5 月発行）。分子研創設に至る十四年間の経緯が非常によくまとめられております。

長倉先生は東大物性研時代から分子研創設に深く関わってこられました。それでは、長倉先生の「分子研前史」に沿って、まず分子研の創設に至る十四年間の主な出来事について一通り簡単に説明させていただきます。

「分子科学」という名称が公式文書に用いられた最初は、昭和 36 年に文部省に提出された総合研究「分子科学 - 分子の化学物理的研究」の申請書だったそうです。このときの代表は、当時の東大理学部物理教室の小谷正雄教授でした。



昭和 38 年から 40 年にかけて、日本化学会に「化学研究将来計画委員会」が設けられ、化学系の諸分野から提案された 6 研究所、すなわち天然物有機化学、高分子科学、錯体化学、分子科学、基礎有機化学、地球化学の六つの研究所が必要であると結論されました。しかし、この段階では、優先順位は決めなかったそうです。長倉先生はこの委員会に最初から出席されておられ、一連の議事録を分子研史料室に頂いています。この「化学系 6 研究所案」は、昭和 40 年の日本学術会議（第 4 部会）において審議されました。その結果、分子科学は化学研究の基盤を形成し、物理学との関連が深いという結論に達し、日本学術会議・第 44 回総会で最終的に採択されまして、「分子科学研究所（仮称）の設立」に関する勧告が総理大臣に出されました。学術会議の勧告を受けて、昭和 44 年に「分子科学研究所小委員会」が発足しました。長倉先生はこの小委員会にもメンバーとして入っておられました。この小委員会で議論された最初の構想は、物性研タイプの東大附置の研究所を設立する案でした。場所の候補としては、東京天文台や千葉の東大第二工学部の跡地などだったそうです。しかし、東大附置の案は当時の大学紛争によって見通しが立たなくなったため、小委員会で白紙に

第 I 部 本研究課題の成果報告

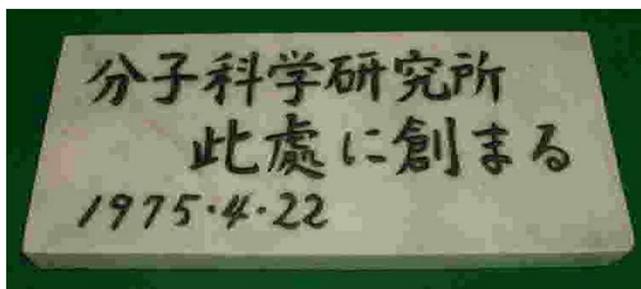
もどされました。そして、委員交替の後、委員長は森野米三先生から赤松秀雄先生にバトンタッチされ、分子研は「国立大学共同研究機関」にするという案に改められ、場所としては東京近郊のほか、静岡、浜松、岡崎、京都などが検討されました。さらに、昭和 46 年から 47 年にかけて「科学研究費特定研究課題・分子科学」が文部省に認められ、国内の分子科学の研究体勢が盛り上がり、多数の分子科学の研究者に大きな励みになりました。余談になりますが、当時、私は北大に在籍しておりまして、新しい実験装置の開発に大変恩恵を受けました。そうした経過を経て、昭和 49 年にやっと分子研創設準備室が認められました。準備室の室長は井口洋夫先生でした。そして、翌年の昭和 50 年に岡崎の愛知教育大学跡地に分子研が設立され、赤松秀雄先生が初代所長になりました。学会会議の勧告から丁度十年の歳月を要したことになります。

史料収集の一覧（一昨年まで）

- ◆ 日本学会議の勧告以前および分子研準備室まで
： 80件（長倉先生）
- ◆ 分子研準備室および創設期：230件（井口先生）
- ◆ 分子研サーキュラー・分子科学研究会・
創設協力者会議：80件（細矢氏・岩田氏ら）
- ◆ 分子研設立要望書や設立案、分子研要項など
： 5 冊子（機構の図書館）
- ◆ 各種委員会の議事録集：36冊（事務センター）
- ◆ 創設披露宴・十周年記念式典などの写真アルバム
： 30冊（岡崎統合事務センター）

このスライドは、一昨年までに分子研史料室で収集・保管した史料の一覧表です。日本化学会・将来計画委員会の議事録や学会議の勧告を受けて設けられた分子研小委員会の議事録などは長倉先生から提供して頂きました。その中には、先程お話ししました東大附置研の最初の構想やその後の大学共同研究機関の構想に関する議事録も入っています。さらには特定研究「分子科学」の史料なども頂いています。井口先生からは、主に準備室時代の史料を提供して頂いております。そ

の中には、取扱注意のマークが入った人事関係の書類もあり、また土地の問題などの記録や建築の設計図などもあります。その他、分子研創設当時の種々の出版物（冊子）や各種委員会の議事録など、さらに写真アルバムなど、多数の史料を提供していただきました。



【分子研創設記念の石碑 井口先生提供（平成 20.1.14）】

上は大理石で作られた創設記念の石碑の写真です。ここに、1975年（昭和50年）4月22日の日付が書かれていますが、4月1日でないのは国会の承認が遅れたためだそうです。



赤松秀雄先生
初代所長
(昭50-56年)

左は分子研の初代所長・赤松秀雄先生の写真です。赤松先生は所長を昭和50年から6年間つとめられました。

分子研創設当時の陣容は、次のスライドにまとめてありますように、5研究系（17研究部門）、6研究施設、および技術課でした。なお、大学と同じように、各部門の構成は教授・助教授・助手（2名）からなっております。その他、客員部門や外国人客員部門もあります。初代の技術課長は名大理学部の工作室におられた高橋重敏氏でした。



このスライドは、通称 UVSOR と呼ばれている分子研の放射光実験施設の写真です。シンクロトン放射光のビームが出ましたのは、分子研創設から 8 年後の昭和 58 年で、長倉先生が二代目所長のときでした。



UVSOR 昭和 58 年 電子貯蔵に成功

2. 中村宏樹（平成20.3提供）

分子科学サーキュラー（号）

1, 2, 3, 4, 6, 8,
9-10-11（合併）
12, 14, 15, 16, 18, 19

3. 小谷野猪之助（平成20.3提供）

- 分子科学若手グループ会報（昭42-47）
- 分子科学若手グループの資料（昭43-45）
- 分子研の設立に向けての資料（昭43-44）
- 分子科学会会報（昭42-45）
- 分子科学研究会の資料（昭42-44）
- 分子研関係の冊子（昭44）
- 新聞記事（素粒子研）（昭43-44）

4. 井口洋夫（平成20.5提供）

- 「我が国学術体制に新しい流れを吹込む」
日本工業新聞（昭60.9）
- 「極端紫外光実験施設--分子の新しい機能開発」
科学新聞（昭59.6）
- 「分子科学研究所の挑戦--新しい化学を追って」
ニュートン（昭58年6月号）
- 冊子「分子科学研究所」（24頁）
- 1979 分子研要覧（32頁）
- 1976 - 1988 岡崎コンファレンス（8頁）

次の数枚のスライドは昨年収集された史料のリストです。まず、昨年3月、中村現所長から「分子科学サーキュラー」19冊が提供されました。それ以前に、細矢治夫氏（お茶の水大学名誉教授）および岩田未広氏（分子研名誉教授）からも提供されており、かなり重複していますが、13号だけは残念ながらまだ欠けています。

これらの史料は、「分子研若手グループ会報」や「分子科学会会報」など7種類の史料で、昨年3月、姫路工大名誉教授の小谷野猪之助氏から提供して頂きました。小谷野氏は分子研創設後すぐに助教授として着任された方ですが、その前から分子科学の若手グループのリーダー的な活躍をされていました。

昨年5月、井口先生から数回にわたって郵便や小包で送って頂きました。「科学新聞」や「科学雑誌ニュートン」の記事など7種類の史料です。

第 I 部 本研究課題の成果報告

5. 井口洋夫 (平成20.5提供)

- ・「分子研の設立」推進委員会
赤松・長倉・井口 (昭48.10)
- ・「特定研究・分子科学」経過報告 (昭48)
- ・「分子研 (仮称) 設立要望書ならびに設立案」
日本学術会議・化研連・分子科学小委員会 (昭40)
- ・「分子研概算要求第二次試案」
創設費、大型研究関係、部門通常経費など
- ・「総合研究B・分子科学」経費17項目 (昭49)
- ・「科研費総合B「分子科学」昭48年・実績報告書
- ・「分子研創設準備室の発足の予定」
小委員会宛の書簡、赤松秀雄

6. 井口洋夫 (平成20.6提供)

「分子研一般公開」ポスター (昭63年)

7. 井口洋夫 (平成20.7提供)

- ・日英協力事業「分子科学」
- ・日英協力事業「分子科学」資料
- ・分子研の諸規定
- ・おかざき寺子屋教室

8. 赤松康江 (平成20.7提供)

写真アルバム 3冊
(分子研創設および赤松所長送別)

9. 井口洋夫 (平成20.10提供)

- ・岡崎コンファレンスの資料 (58件)
- ・分子研シンポジウム
- ・マリケン教授来所記念 (6件)
- ・分子研関係の新聞記事 (58件)
- ・分子研の諸規程 (25件)
- ・分子研創設十周年記念 (資料10件)

10. 技術課 (平成20.5提供)

- ・ビデオテープ (13 本)
- ・写真アルバム (14 冊)

同じく井口先生から、昨年5月、「分子研の設立」推進委員会や「分子研概算要求第二次試案」など、11種類の史料を頂きました。

さらに6月に分子研「一般公開」のポスター、7月には「日英協力事業」の史料など9種類を井口先生から提供して頂きました。

さらに、昨年7月に赤松先生のご遺族から、赤松先生の所長時代の写真アルバム3冊を頂きました。それから、井口先生から昨年10月に岡崎コンファレンスの史料など5種類の史料を頂きました。

さらに、技術課から創設時代のビデオテープと写真アルバムが提供されました。

次に、分子研関係の写真ですが、これまでアルバムに入った多数の写真が事務局や技術課から提供されています。ここで、比較的初期の時代の3枚の写真をご

分子研アーカイブズの現状（木村）

覧いただきたいと思います。左下は昭和 54 年の分子研創設披露宴（設立後 4 年目）のときの写真でして、東大の小谷正雄先生と森野米三先生、それから北大の物理化学の東健一先生が写っています。右も創設披露宴のときの写真で、ここには京大の福井謙一先生と東大の森野先生が写っています。そして分子研の十周年記念のとき（昭和 60 年）に全員が中庭に集合した撮った集合写真です。



分子研創設披露宴にて
小谷先生、森野先生、東先生



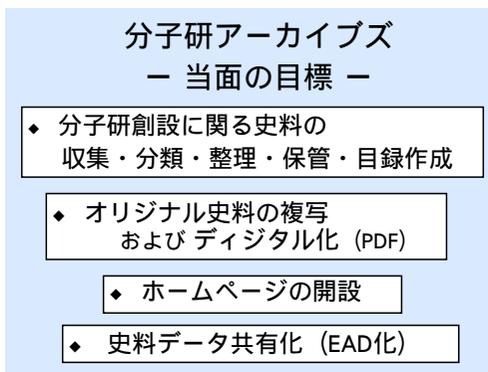
分子研創設披露宴にて
福井先生と森野先生



分子研十周年記念 昭和 60 年

第 I 部 本研究課題の成果報告

最後に、当面の目標としましては、引続いて分子研の創設に関する史料の収集・整理、そしてオリジナル史料の複写およびデジタル化、さらに史料データ共有化（EAD化）作業を進めていきたいと考えております。また、史料室のホームページの立上げも検討しているところです。



以上、分子研アーカイブズの現状について報告させていただきました。

【質疑応答】

西村：昭和45年以前の分子研は東大附置研として構想され、45年以降に共同利用研とされたということは間違っていると思います。分子研創設の議論の経緯からみると初めから共同利用研として構想されていたのではないのでしょうか。お話しただけだと普通の附置研究所のように感じられたのですが、いかがでしょうか？それまでの、大学附置の研究所と大学附置の共同利用研究所では、法的にも大学設置法で別になっています。

木村：学術会議の勧告を受けて発足した分子研小委員会での初めの構想は、私がお話しした通りで間違いはありません。つまり、最初の案は物性研タイプの東大附置の共同利用研を設置するという構想でした。このことは当時の分子研小委員会の議事録や長倉先生の分子研前史にも記載されています。このことは、当時の小委員会のメンバーや一部の東大理学部関係者を除けば、一般にはあまり知られてないようです。

小沼：この議論は、共同利用研究所と共同利用機関との違いを理解しないと混乱します。共同利用研究所は、正確には国立大学附置共同利用研究所であって、1953年に京都大学基礎物理学研究所と東京大学宇宙線観測所が同時に初めて作られました。それまでも国立大学にはたくさんの附置研究所がありましたが、共同利用研究所は国立学校設置法のなかでも別に規定されました。分子研は1965年12月13日に学術会議の第44回総会から内閣総理大臣に設置が勧告されました。共同利用機関は、長年にわたる学術会議と文部省での検討・準備の末、1971年に高エネルギー物理学研究所（KEK）が第1号として発足しました。その後、分子研も含めて、総研大に関係している多くの研究所や研究機構が今日のようにできてきた次第です。

高岩：分子研創設が決まるまで長い間かかったということですが、具体的に何か懸案があったのか、もしくは？

第 I 部 本研究課題の成果報告

小沼：大学紛争も一因。

高岩：大学紛争でということですが、周囲の状況がそうであったという意味でおっしゃったのか、それとも分子研の計画の中で、具体的に、大学関係者内にドラマやコンフリクトがあったのかどうか？

木村：大学紛争は分子研の設置形態に大きな影響を与えたようです。最初の東大附置の案は大学紛争によって見通しが立たなくなったため白紙に戻されましたそうですが、東大理学部の中で大学院の問題もあったようです。

小沼：KEK をつくろうというお話の中で、歴史との関係について一言。東大原子核研究所は 1955 年に創設され、加速器も理論も宇宙線も動き出しました。加速器（電子シンクロトロン）をつくった後、次はどうするのかといった話が始まったのは 1950 年代後半のことでした。それがようやくまとまって勧告が出されたのが 1962 年。ところがそこから先は研究者と文部省の間で食い違いが繰り返されかみ合いませんでした。そして最終的に 1971 年に発足するわけです。その最終段階の前には、専門に関係なく大学の外に研究所をつくる時の方法、どういった制度のものをつくるのかといった話が出ました。これは、大学との人事交流などがスムーズに行なえるために必要な制度づくりだったわけです。それを学術会議で話し合ったのです。具体的には KEK の話と一般的な話を兼ねた話し合い。それが決まったので、分子研も正にそういったタイプの研究所でいこうといった話になったという風に聞いております。もちろん、ダンプカーが止まって道をふさいでいたのも大学紛争があったのも本当です。

関本：やはり、自然科学研究系の研究所はそれぞれ独立しているようだが元はつながっているのですね。